

いねむり平太

新しい日本の童話シリーズ 11



宮下

913 宮下和男
(NDC)

いねむり平太

学習研究社 昭和50 (1975)

199p 図 23cm

(新しい日本の童話シリーズ・11)

新しい日本の童話シリーズ・11

いねむり平太

作 者・宮下和男

画 家・北島新平

発行人・渡部ひろし

編集人・石井和夫

印刷所・東洋印刷株式会社

製本所・有限会社黒田製本所

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台 4-40-5

振替 東京 142930

© 1970

5005

■この本の内容に関する問合せ、製本上のミスなどありましたら、下記あてをお願いします。

文書は、東京都大田区上池台4-40-5 (〒145) 学研ユーザー・サービス部「児童図書係」

電話は、東京 (03) 720-1111 (大代表)

新しい日本の童話シリーズII

いねむり平太

宮下和男・さしえ北島新平



いねむり平太^{へいた} もくじ

* うつらうつら……5

* 花^{はな}の舞^{まい}……12

* すがめの岩^{がん}十^{じゅう}……26

* ウツラ山^{やま}・コックリ山^{やま}・グッスリ山^{やま}……39

* 小^{ちい}さな仲^{なか}間^ま……47

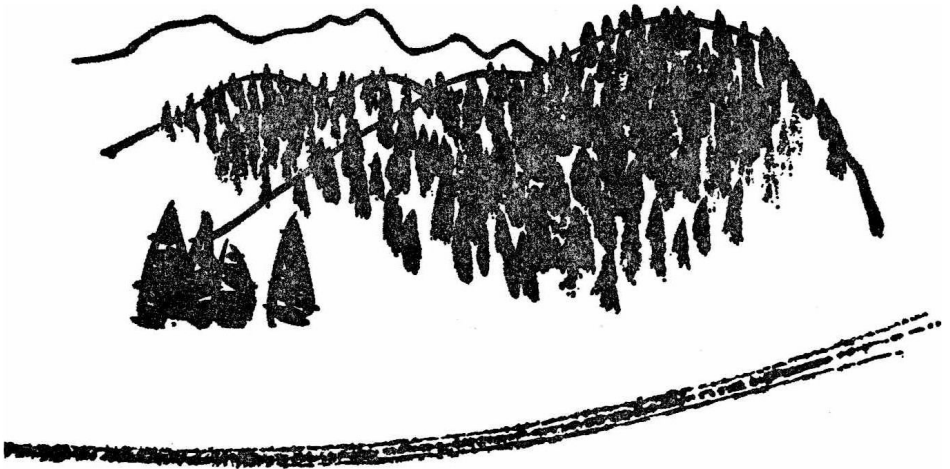
* トチノキのほらあな……52

* けんかはよせや……56

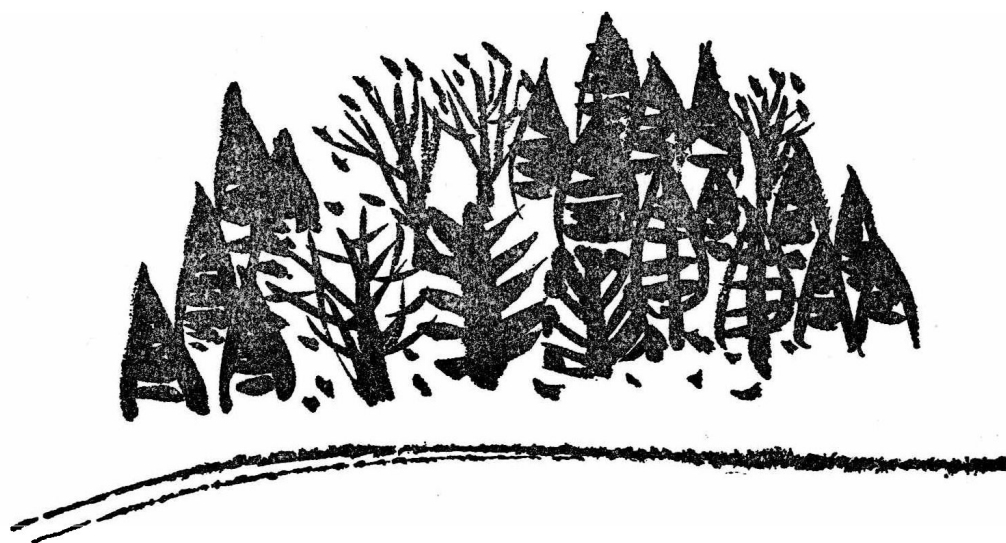
* ハイ、ごめんなんしょ……63

* 竹^{たけ}づつの酒^{さけ}……71

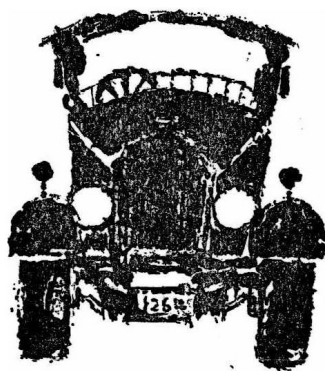
* 九助^{きゅうすけ}のちえ……78



* 力がわいたぞ……	90
* ジャガイモの山……	97
* きられたスギの木……	102
* タヌキのかつやく……	109
* マムシぜめ……	119
* 山の講……	128
* 山のおおかみたち……	136
* 平太のひらめき……	148
* あらし……	156
* 平太の作戦……	173
* ねむり堂……	188



装丁デザイン 池田龍雄



うつらうつら

「ジャガイモ、ジャガイモ、でっかくなれ。おらのこぶしほどでっかくなって、土^{つち}んなか
でござってふえろ。」

平太^{へいた}は、ひとりごとをいいながら、ヒルネ平^{だいら}の畑^{はたけ}で、ジャガイモの土^{つち}よせをしていま
す。一クワ一クワ、黒土^{くろつち}をほりおこしては、ていねいにジャガイモの根^ねもとへもりあげて
いきます。

平太^{へいた}は、ことし二十さいのわかものですが、のほほんとした大^{おお}きなからだには、どこと
なくしまりがありません。

ぼさぼさのかみの毛^けは、畑^{はたけ}しごとのじゃまになるのか、つる草^{くさ}でしばって、ちょんまげ
のようにむすんでいます。胸^{むな}はぼがひろすぎるせいかな、平太^{へいた}のきている色^{いろ}あせた野良^{のら}着^ぎの
えりは、いつもどわんと口^{くち}をひろげています。

その、むぞうさにきながした野良着から、によっきりつきでたふとい手足は、日にやけてアカマツの木はだのような色をしています。

ヒルネ平は、村のまんなかをながれる霧ふき川を、どんどん北へのぼったところの山ふところひらけた、シラカバやクリの林にかこまれたほそながい草原です。むかし、この村にひとりの大男がすんでいて、いつもその草原でひるねをしたという話から「ヒルネ平」とよばれています。

平太は、ばあさまとふたりで、そこにすんでいました。ススキやワラビの根をほりおこしてたがやした畑は、土が黒くろとしてやわらかく、ジャガイモでも、トウモロコシでも、毎年よくみのりました。

五月のひざしは、きょうもヒルネ平にきもちよくふりそそいでいます。さわやかな風がシラカバの葉をキラキラさせ、カッコウが、平太にさそいかけするように、声たかくないていました。けれども平太は、わきめもふらずにクワをうごかしています。

ところが、しばらくすると、平太はクワをにぎったまま、うつらうつらといねむりをは

じめました。平太へいたの大きなからだおおが、前にうしろに、二度三度どゆれたかと思おもうと、まるで、たわいもなく土俵どひようの上うへにころがるよわいおすもうさんのように、畑はたけのなかへごろりとよこになりました。

平太へいたはそのまま、ジャガイモ畑ばたけのうねのあいだで、片うかたでをまくらに、きもちよさそうにねむってしまいました。ぽってりふとった平太へいたのねがおは、ちょうどジャガイモを大おおきくしたようなかたちに見えみました。まぶたは、ハチにさされたようにはれぼったく、くちびるにもしまりがありません。

平太へいたのジャガイモ畑ばたけは、うねのはばが、ふつうの畑はたけの二倍ばいもありました。それは、平太へいたがジャガイモのたねをまくとき、うねほってはごろり、二うねほってはごろりと、うねのあいだでいねむりをしたからです。

けれどもそのおかげで、ジャガイモはよく根ねをはって、土つちのなかでごろごろふとり、夏なつになると、おき場ばにこまるほど、たくさんとれました。



やがて、ねむっている平太の足を、ちょんちょんつくものがあります。カラスの九助です。

カラスの九助は、いつも平太のそばにいて、ときどきくちばしで平太の足をつついては、「平太さん、そろそろおきてくださいよ」とあいずするのが役目です。きょうは、ジヤガイモの葉っぱにつく Tentoumushi を見つけてたいじしていましたが、いま、平太のばあさまが、昼ごはんをもって家からでてきたので、平太をおこしたところです。

「うーん」と、大きなびをして、平太はおきあがりました。

「平太よ、土よせはえらいしごとだで、はらがへったずら。さあ、昼ごはんができたで、ちやつと（早く）たべろや。さっき、つり源さがきて、大きなイワナを三びきおいてったでしおやきにしてつけてきた。」

ばあさまは、さなぎのようにちぢんだからだをこまめにうごかして、平太の昼ごはんをおぜんにのせ、家のよこにある大きなスギの木の根もとへはこんでいきました。

そのスギの木の根もととは、平太が毎日昼やすみをする場所になっていました。スギの

大木は、たくましい枝を空にひろげて、平太の小さな家をかかえこむようにして立っています。

「ああ、ばあさま、いつもすまん。う。おらはまた、こんなところでねむってしまったわ。どうしておらはこうもねむいもんずら。」

平太は、ジャガイモ畑からのそりとあがってきて、スギの木の根もとにどんとすわりこみました。

カラスの九助は、平太よりひと足さきにきて、昼ごはんのおぜんまわりをとびあるいています。しおやきのイワナのこうばしいにおいをかいだので、じっとしておれないのでしょう。

平太は、まだねむたそうに、はれぼったい目をこすっていましたが、やっぱりおなかはすいていたとみえて、もっくらもっくら、昼ごはんをたべはじめました。しおやきのイワナも、しっぽのほうからぱくりぱくりと、たちまち二ひきまでたべてしまいました。

九助は気が気ではありません。「おいらの分もすこしのこしといってくださいよ」という

ように、平太^{へいた}のひざもとで「カアカア」なきました。

そのうちに平太^{へいた}は、またうとうと、いねむりはじめました。まだ、昼^{ひる}ごはんをすっかりたべおわらないうちに、平太^{へいた}は、大きなからだをふといスギの根^ねもとによりかけると、手^てからぼろりとはしをおとして、いいきもちでうつらうつらねむってしまった。

九助^{きゅうすけ}は、ちよつと首^{くび}をかしげて、平太^{へいた}のねがおを見^みつめていましたが、やがてひよいとおぜんのはしにとびのると、「そんなら、のこりのおさかなは、おいらがかたづけましよう」というふうに、さっきからねらっていたしおやきのイワナを、ちよんちよんつつきはじめました。

平太^{へいた}は、スギの木^きにもたれて、うつらうつらとねむっています。ばあさまは畑^{はたけ}にでて、



せっせと草をむしっています。みどりの光が、ヒルネ平をうっとりつつんでいました。

花の舞

平太が、こんなふうにいねむりばかりしているのは、平太の家がヒルネ平にあるからではありません。平太は子どものころからねむり病にこりつかれて、道を歩いても、一キロといかないうちにねむくなって、道ばたの草むらにころげこんでは、うとうといねむりをするのでした。

村の子どもたちと、かくれんぼをしてあそんでいても、平太はどこかへかくれたまま、いつまでたってもでてきません。みんなでさがしてみると、わら小屋のなかにもぐりこんで、そのままねむっているのです。

そんなわけですから、子どもたちは、平太のことを「いねむり平太」とよんで、あまりあいてにしませんでした。

平太の家も、もとからヒルネ平にあってたわけではありません。平太の生まれたところは「山銀」といって、村いちばんの山もちの家で、たいした屋敷を村のまんなかにかまえていました。

ところが、平太の生まれるすこしまえに、父親は足に小さなけがをしたのがもとで、破傷風という病氣にかかって死んでしまいました。

母親は、それをなげきかなしむうちに身もやつれて、平太を生むとまもなく、ねむるように息をひきとりました。

ばあさまは、あかんぼうの平太をだきかかえて、いちじはとほうにくれましたが、「こんなかわいい宝物をのこしてくれたんだで、ありがたいと思わにゃいかんわ。」と、氣をとりなおして、平太をだいじにそだててきました。

けれどもその平太が、五つになっても六つになっても、いねむりばかりしているので、ばあさまの心配はつのるばかりです。

開命堂の運三さという医者に、なんどかみてもらいましたが、

「こりゃあ生まれつきの病だで、すぐにはなおらん。医者いしやの書物しよもつにもまだのっておらん、めずらしい病やまいだでう。」

と、運三うんぞうさは、いかにもむずかしい顔かおをして、すこししかないあごのひげをなでてばかりいました。

やがて、平太へいたも十さいになり、村むらでは冬まつりもちかづきました。平太へいたとおなじ年としの村むらの子どものなかには、冬まつりの花はなの舞まいにでるものもいるというのに、平太へいたはあいかわらずいねむりばかりしています。

「あんなやぶ医者いしやの運三うんぞうさじゃあてにならん。こりゃあひとつ、『コンコンさま』におがんでもらうっちゅうもんだぞ。」

平太へいたのとなりの家いえのつり源げんさは、とうとう見るに見かねて、峠とうげを三つこえた南みなみの村むらの「コンコンさま」という祈きとう者しやのところへ平太へいたをつれて行って、おがんでもらいまし
た。



コンコンさまは、目のつりあがった青白い
顔の女の祈とう者で、ふといろうそくをなん
本もともじたあやしげな部屋のなかへ平太を
ねかせておいて、なにやらはげしくじゅもん
をとなえていましたが、やがて、のどのおく
からしぼりだすような声でいいました。

「この子は、ねむり神というわるい神にとり
つかれておる。このねむり神をおいはらうに
は、村のまつりの晩に、正当な神の前でいっ
しんにまうことじゃ。」

これをきいたつり源さは「しめた!」と、
心のなかで手をうちました。村の冬まつり
で、平太に花の舞をまわせれば、ねむり神を